

研究会・シンポジウム報告

2020年10月11日（日） 定例研究会報告

テーマ： 日本における感染症流行の歴史的研究

報告1： 工業化・都市化と結核

報告者： 花島誠人氏（国立研究開発法人防災科学研究所・主幹研究員）

報告2： 日本における感染症史研究の現状と課題

報告者： 廣川和花氏（専修大学文学部・准教授）

時間： 13時00分～16時30分

場所： Zoom

参加者数：12名

報告内容概略：

社研特別研究「ポスト・コロナ時代における経済社会の変容」との共催で企画されたこの定例研究会では、現在の新型コロナウイルス感染症流行と経済社会の関係を考えるにあたり、その歴史的経緯をふまえるために、日本における感染症流行の経済史・社会史的研究に関する二人の専門家をお招きした。花島報告では、日本の社会疫学調査の草分け的存在である石原修『衛生学上ヨリ見タル女工之現況』（1914年）で指摘された大阪など大都市の紡績工場で働く女工たちの「帯患帰郷」論に関連して、府県別・地域別の結核死亡率や、出稼ぎなど労働移動のパターン、工場における労働実態、綿紡績業や絹製糸業といった繊維工業内における業態ごとの特徴などについての地理学的視点もまじえた詳細な分析にもとづきつつ、近代日本における結核の蔓延が、産業や大都市・地方関係のあり方と密接に関連していたことが明らかにされた。続く廣川報告では、感染症流行と一口にいても、襲来型急性感染症（コレラやインフルエンザなど）、常在型急性感染症（腸チフス・赤痢など）、慢性感染症（結核・花柳病・ハンセン病など）というように流行様態にはいろいろあり、病気によって感染経路・感染力なども異なるがゆえに、歴史のなかでの人びとの反応や社会的対応もさまざまであったこと、さらに地域・時代ごとに多様でありうる科学・文化・社会の状況をふまえた歴史的な視点が重要であることが指摘された。

記：専修大学経済学部・永島剛